

吉本隆明全著作集

6

吉本隆明全著作集

6

文学論
Ⅲ

勁草書房

吉本隆明全著作集 6

昭和四七年二月二十五日第一刷発行
昭和四九年七月一日第四刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

〔東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号東京八一四局六八六一 郵
便番号一二二 振替口座東京一七五
二五三番〕

印刷所 精興社

製本所 青木製本

*定価は外函に表示してあります。

© 1972 by Takaaki Yoshimoto

目

次

序	三
第Ⅰ章 言語の本質	一〇
1 発生の機構	一〇
2 進化の特性	二四
3 音韻・韻律・品詞	四一
第Ⅱ章 言語の属性	五
1 意味	五
2 価値	三七
3 文字・像	六
4 言語表現における像	七
第Ⅲ章 韻律・撰択・転換・喩	一〇四
1 短歌的表現	一〇四
2 詩的表現	一三

3	短歌的喩	三三
4	散文的表現	四七

第IV章 表現転移論

第I部 近代表出史論（I）

1	表出史の概念	一五
2	明治初期	一五
3	「舞姫」・「風流微塵藏」	一七
4	「照葉狂言」・「今戸心中」	一八
5	「武藏野」・「地獄の花」・「水彩畫家」	一四

第II部 近代表出史論（II）

1	自然主義と浪漫主義の意味	一九
2	「それから」・「キタ・セクスアリス」	二〇
3	「網走まで」・「刺青」・「道草」	二九
4	「明暗」・「カインの末裔」・「田園の憂鬱」	三四

第Ⅲ部 現代表出史論……………二四〇

1 新感覚の意味……………二四〇

2 新感覚の安定（文学体）……………二五一

3 新感覚の安定（話体）……………二六六

4 新感覚の尖端……………二七五

第Ⅳ部 戦後表出史論……………二八一

1 表現的時間……………二八一

2 断絶的表現……………二八六

3 断絶的表現の変化……………二九三

4 断絶的表現の頂点……………三〇六

第Ⅴ章 構成論……………三二五

第Ⅰ部 詩……………三三五

第Ⅱ部 物語

1	前提	三五
2	発生論の前提	三八
3	発生 of 機構	三七
4	詩の発生	三六〇
5	古代歌謡の原型	三七一
第Ⅱ部 物語		
1	問題の所在	四〇〇
2	物語の位相	四〇六
3	成立の外因	四一一
4	折口説	四一五
5	物語のなかの歌	四二〇
6	説話系	四二四
7	歌物語系	四二八
8	日記文学の性格	四三二

9	源氏物語の意味	四三七
---	---------	-----

10	構成	四四一
----	----	-----

第Ⅲ部	劇	四四四
-----	---	-----

第Ⅰ篇	成立論	四四四
-----	-----	-----

1	劇的言語帯	四四四
---	-------	-----

2	舞台・俳優・道具・観客	四五五
---	-------------	-----

3	劇的言語の成立	四五九
---	---------	-----

4	劇的本質	四六六
---	------	-----

5	劇の原型	四七一
---	------	-----

6	劇的構成	四七八
---	------	-----

第Ⅱ篇	展開論	四八七
-----	-----	-----

1	「粹」と「俠」の位相	四八七
---	------------	-----

2	劇的思想	五〇一
---	------	-----

3	構成的思想（Ⅰ）	五〇七
---	----------	-----

4	構成的思想(Ⅱ)	五三
5	展開の特質	五六

第Ⅵ章	内容と形式	五五
-----	-------	----

1	芸術の内容と形式	五五
2	文学の内容と形式	五八
3	註	五八
4	形式主義論争	五九

第Ⅶ章	立場	五七
-----	----	----

第Ⅰ部	言語的展開(Ⅰ)	五七
1	言語の現代性	五七
2	自己表出の構造	五八
3	文学の価値(Ⅰ)	五九

第Ⅱ部	言語的展開(Ⅱ)	六六
1	文学の価値(Ⅱ)	六六
2	理論の空間	六〇
3	記号と像	六六
あとがき		六三
解題		六五
索引		

言語にとって美とはなにか

序

もう可成りまえのことになるが、少数の仲間で作っていた雑誌『現代批評』に、「社会主義リアリズム論批判」という文章をかいたところから、わたしは数年のあいだやってきたプロレタリア文学運動と理論を批判的に検討する仕事に、じぶんで見切りをつけていた。そこで生みだされた少数の作品をのぞいては、この対象から摂取するものがなく、批判的にとりあげることが、いわば対象的に不毛なことに気づきはじめていたのである。もうじぶんの手で文学の理論、とりわけ表現の理論をつくりだすはかに道はないとおもった。プロレタリア文学運動とその理論の検討という課題は、わたしにとってたんに文学の問題だけではなく、思想上のすべての重量がこめられていたので、ついにじぶんのやってきたことは空しい作業だったかという覚醒は辛いものであった。それゆえ、わたしの主観のなかでは、じぶんの手でつくりあげてゆかねばならない文学の理論は、とうぜん思想上の重荷をも負わなければならぬものであった。その時期が、わたしの文学上の最大の危機であり、わたしは少数の言語理論上の先達にたすけられながら、まるで手さぐりで幾重もたちふさがった壁をつきぬけるような悪戦を つづけた。そして本稿によって、わたしは思想上の責任を果しながらその作業をおえることができたのである。

そのころ、少壮の才能ある批評家江藤淳が『作家は行動する』という優れた文体論を公刊した。こ

の著書は、すくなくともわが国の文芸批評史のうえでは劃期的なものであることを、批評家たちは看ぬいてはいなかった。おそらく、もっともこの著書に関心をいだいて読んだのは、おなじ問題を別様に展開しようとかんがえていたわたしではないかとおもう。

そのころ、わたしは、まず〈言語〉とはなにかというはじめての問題にぶつかっていた。そのような関心のなかで三浦つとむの『日本語はどういう言語か』という小冊子にであい、哲学者として知っていたこの著作家が、年期のはいった言語学者であることをはじめて知った。この著書からたくさん啓発をうけた。わたしは、言語学関係の手に入る著書をあつめて、〈言語〉とは何かについて、明瞭な像をつくりあげようと腐心した。頭腦的な理解ではなく〈言語〉の像をじぶんの手にしっかりとにぎることができるのが理想であった。これはことのほか難かしく、長びいたが、どうやら〈言語〉というわたしなりの像が浮ぶようになった。文学が言語で創られる以上は、この像からはじまり、具體的作品にいたるすべての問題は解きうるはずである。そこではじめて、本稿に着手したのである。

わたしは、かつてのわたしのようにプロレタリア文学理論の延長線に彷徨し、その範疇にある読者が、わたしの試みを誤読することについて、あらかじめ封じ手を打っておく必要はないとおもう。ただ、わたしの知っているかぎりでは、現在〈社会主義〉諸国で流布されている文学理論よりも、本稿の試みの方が遙かに先んじているはずである。もちろん、わが国の進歩派文学理論は、いつも世界の後を追うだけだから、ここでは問題にならない。ただ断っておかねばならないが、理論的先駆性ということは、本稿の出来ばえということと同一ではない。わたしはじぶんの力量を、いいかえればじぶん自身をよく知っており、それについては読者の評価如何にかかわらず、自惚れも卑下ももっていない

い。本稿の特長は、何よりも誤謬があれば、どんな読者にも論理的にそれを指摘することができ、どんな読者も、本稿を土台にして、それを改作し、修正し、展開しうる対象的客観性をもっているという点にある。どんな文学理論も政策論か、あるいは、個性的な独白であるという現状で、わたしが企図したことのひとつはその点にあり、それは誇ってもいいことだとかんがえている。わたしが、本稿を理解してくれこれくらいのところは自明の前提として踏まえてほしいと考えている種類の読者は、政策文学論の因襲や、自惚れや、過去の栄光をわすれかねて、本稿のモチーフをほんとうに理解するのあと十年くらいを要するだろう。だが、あまりとらわれない読者は、すなおに評価してくれそうな予感がある。こういう逆説や不毛は、わたしには親しくなっている。本稿を考えノートしてきた間わたし個人が体験してきた苦勞についてかくのはおっくうになっているが、わたしを文学的に、政策的に非難してきた連中は、本稿の出現によって文学理論的に「死」ぬことは確かである。歴史の審判を、その程度には、わたしも信じている。

文学は言語でつくった芸術だといえば、芸術といういい方に多少こだわるとしても、たれも認めるにちがいない。しかし、これが文学についてたれもが認めうるただひとつのことだといえれば人は納得するかどうかからぬ。いったん、言語とはなにか、芸術とはなにか、と問いはじめると、収しゅうがつかなくなる。まして文学とはどんな言語本質のどんな芸術なのかという段になると、たれもこたえることができないほどである。文学のいくらかでもまともな考察が文学者の個性的な体験の理論となるか、政策からおっかぶせた投網のような政治的文学論とならざるをえないゆえンである。こういった厄介な問題の性格を熟知していたポール・ヴァレリイは『文学論』でたれでも吐きたくなる名言を

吐いている。

芸術にあって、理論は大して重要でないという説があるが、これは諷刺も甚だしい。これは、理論が、ただ世界的に共通する価値をもたないということではしかない。理論はいずれもただ一人のための理論なのである。一人の道具なのである。彼のために、彼にあわせて、彼によって作られた道具なのである。理論を平気で破壊する批評には個人の欲求と傾向とが分かっている。X氏の道具である理論は、X氏には真理であるが、一般的には真理でないと理論自身が宣言しないのが理論の欠点なのである。（堀口大学訳）

名言が名言であるゆえんは、それが多数の人間の胸にすみつくことだ。今日、保守的な文学者にとって、理論はいずれもただ一人のための理論で、一般的に真理であるような理論などはありえないというヴァレリーのことはうたがいようもない常識にしかすぎまい。いや、政治的文学論の網にかかった文学者にとっても、かれが創造を体験しているかぎり、頭はばたきながらヘソのあたりで秘かにおしかくしている禁忌であるかもしれない。

ヴァレリーの言葉には、一般的にいつつぎのような問題がかくされている。

政治的に自由でなくとも、また現実的に苦しめられていても、文学の表現の内部では自由であるということがありうる。そして、この表現内部での自由は、恣意的でありうる社会のなかでの「仮象」であること。それゆえ、社会の外で、いいかえれば文学表現の内部では、どのような政治的な価